

やないな」

「エエ、そうや唯者やない……」

「あれ、出てたんやらう」

「そうや、出てたんや」

「何處や、南か」

「南や」

「あれ、藝者か、それとも娼妓か」

「イ、ヤ、幽霊や」

「そらなんと言ふ手つきや、いつたいなんや」

「實は、あれは人間やないのんや」

「人間やないと言ふと」

「斯れ〜斯う言ふ譯やね」

「ゲエ、源さん、お前なにか、幽霊を嬬に仕たのんか」

「そうや、保さんお前も獨身やが、嬬を持たら幽霊を嬬に仕いや、徳やで」

「源さん幽霊を嬬に仕たら得か」

「得やがな、それ見てみ、晝は今日さんのお照しで依う出てこん、晝居なんたら、三度の飯を食はんがな、それだけ得や、頭は年中散亂髪や、髪結賃がいらん、油がいらん、びん附がいらん、元結がいらん、着物は盆が來ても正月が來ても、彼れ一枚や、なるだけ古いのが價值や、足が無いので足袋履かん下駄履かん、晩に來るときには幽霊火がついて來る、火を點さいでも宜い、家の中は明るい、こんな得な嬬は無いで」

「ほんに、そう聞くと、そうやな、私も一心寺へ行つて、そんな嬬を探してこう」

我家へ歸ると辨當を拵へて一心寺へ參りました。墓原を彼方此方と探しましたが、骸骨が有りそうな事がない、仕方が無いので、一心寺を出ますと、向ひが安居の天神さんへ、ぶら〜と參りました。

「さつぱりわや、一心寺へ嬬を探しに來て、お寺であぶれて、お宮さんへ來た、併し世間は品物が價上げやの、高いのと言ふのに、此の天神さんだけは、安い〜、安居の天神さんと言ふて評判を取つてはる、お參詣をしよう、お賽錢を一錢（ガラ〜ン、拍手ボン〜）時に天神さん、あんたにお頼みがおますね、隣のヘンチキ、昨晚、嬬を貰ひましたんで、私も急に嬬が欲しうなつてきました、宜い嬬を一人世話しとくなアレ、イエ何んな嬬でも結構だす、歳だすか、何歳でも、ヘエ……私、二十六だす、そこは、二ツ三ツ若ければ、イへ、それは追女でも大事おまへん、と言ふて、私が二十六やのに、嬬が六十三は、チト追女過ぎます、そこは手頃なんが有りましたら一人世話を